

Vol
183

進行する円安だけを見て投資判断しても大丈夫？

足元で市場参加者の大きな関心を集めているのが為替の動向です。日本円は、対米ドルで下落し、4月19日時点で1米ドル＝154円64銭と1990年6月以来、約34年ぶりの水準となっています。

日銀は3月の金融政策決定会合で17年ぶりの利上げに踏み切ったものの、日本の金利水準は依然として諸外国に比べて低い水準にあります。その一方で、米国はインフレ率の鈍化が緩やかなため、米FRB(連邦準備制度理事会)による早期の利下げ観測が後退しています。相対的に金利が高い国の通貨が買われやすい傾向にあることから、「しばらくの間、日米の金利差は縮まらないのでは？」との見方が円安の進行につながっているようです。

コールセンターには、米国をはじめとする、海外資産に投資する投資信託を保有されている方から、「だいたい円安も進んだし、一旦売却した方がよいか」というご相談が増えています。そこで今回は、あらためて投資信託の基準価額の算出の仕組みを整理したうえで、長期の資産運用で投資信託を活用する際の大事な視点についてお話したいと思います。

■米ドル(対円)と日米10年国債利回りの推移(期間:1988年1月1日～2024年4月19日)



※上記は過去のものであり、将来の運用成果等を約束するものではありません。

信頼できると判断したデータをもとに日興アセットマネジメントが作成

日興アセットマネジメント

当資料は、日興アセットマネジメントが情報提供を目的として作成したものであり、特定ファンドの勧誘資料ではありません。また、弊社ファンドの運用に何等影響を与えるものではありません。なお、掲載されている見解および図表等は当資料作成時点のものであり、将来の市場環境の変動等を保証するものではありません。投資信託は、値動きのある資産(外貨建資産には為替変動リスクもあります。)を投資対象としているため、基準価額は変動します。したがって、元金を割り込むことがあります。投資信託の申込み・保有・換金時には、費用をご負担いただく場合があります。詳しくは、投資信託説明書(交付目論見書)をご覧ください。

基準価額の算出の仕組みから改めて考えるべきこと

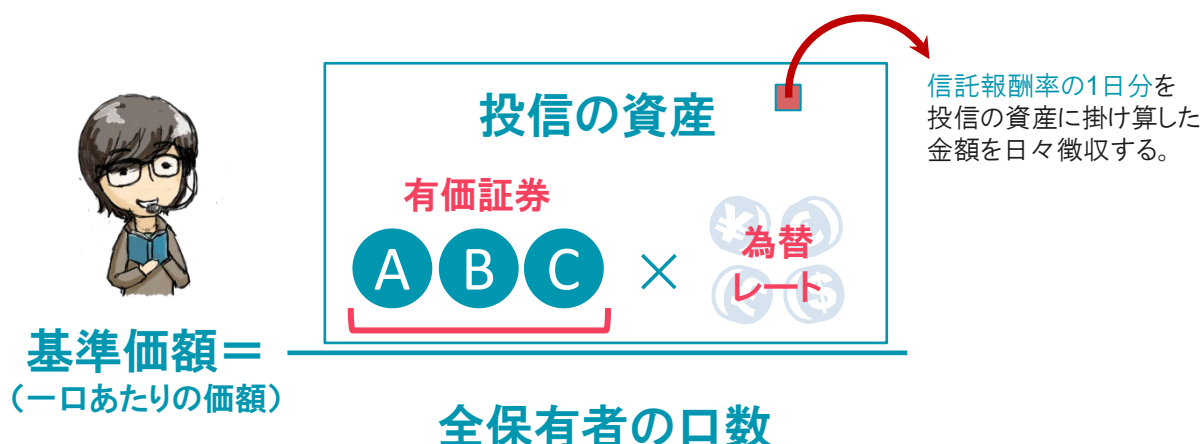
まず、押さえていただきたいのは、投資信託の基準価額の算出の仕組みです。下図を見ると、投資信託の基準価額は、分子である「投信の資産」が変動することで、上下することが分かります。

そして、海外資産に投資を行なっている場合、「投信の資産」は、2つの要素（投資している対象の有価証券と為替レート）の掛け算によって変動します。ですから、一要素である為替レートだけに着目して、投資判断をするというのは、やや早計だと言えます。為替レートだけでなく、投資している有価証券の動向も踏まえて投資判断を下すことが大切になります。

そこで、投資判断を下すときにお勧めしたいのが、「なぜ、その投資信託を買ったのか」という購入の目的を思い出してみるというアプローチです。

お持ちの投資信託の購入を決めた時には、「円安になることを期待して」という方よりも、「投資対象の有価証券の将来性に期待して」という方が多いのではないのでしょうか。とすれば、投資対象の有価証券の値動きにもしっかりと目配りする必要があると言えます。

■投資信託の基準価額の算出の仕組み



※基準価額は、一般的に10,000を掛けて表示されています。

折に触れて、「なぜ、その投資信託を買おうと思ったのか」を思い出す

連日報道されるさまざまなニュースを受けて、日々上にも下にもマーケットは変動します。

34年ぶりの円安と聞き、「高い、一旦売りだ」と急いで投資判断をするのではなく、「投資対象の有価証券が引き続き魅力的か」を検証することが重要です。もし、投資先が変わらぬ魅力があるのであれば、今後の成長に期待し、じっくりと保有を続けることを検討してみてはいかがでしょうか。

折に触れて、「なぜその投資信託を買おうと思ったのか」という、購入の目的を思い出すことが、長期の資産形成において投資信託を活用するための大事な視点だと言えます。



nikko am

コールセンター

0120-25-1404

営業時間 平日 9:00~17:00